



花も草も空気も届け

①46 大長谷の山の植物屋さん



斜面に生えた植物を探る大場さん

夏の足音が近づき、岐阜県境の山道は日に日に緑を濃くする。白木峰のふもとにある富山市大長谷地区の道幅は狭い。大場みゆきさん(45)は慎重に運転する。何かに気付くと車から降りる。助手席にいた愛犬のダックスフントも後を追う。

「みんな意外と通り過ぎちゃうんですね」と道路脇に生えた植物に歩み寄る。深い赤色の小さな花びらを3枚付けたエンレイソウがあった。群生している中から、ほんの少しだけ摘んでバケツにくんだ湧き水に浸す。

車を運転していても、しゃべりながらも花を見つける。「これはヒトリシズカ。摘んでもすぐにしおれちゃうから、ここでこのまま楽しみましょう」。山に咲く花は派手さはないが、凜としたたたずまいが美しい。少し日焼けした顔が白いブラシのような形をした花をうれしそうに眺める。



大場さんは、ここで自生する草花を採り、富山や京都のまちなかにある花屋に届ける。名刺には手書きで「山の植物屋さん」と記す。「珍しい花を紹介したいわけではないんです。山に普通にあるものや、私自身がきれいに感じるものを街の生活に提案したい。この空気も合わせて感じてもらいたい」。たくさん採って市場に卸すことはしない。「来年もまた見たいですからね」

富山市内で花屋を営む菊伊宏美さん(47)も、大場さんを頼りにする。花だけでなく、自身でリースを制作するための材料となる野草も依頼する。「みゆきさんがチョイスする野草や花からは、山の風景がそのまま見えてくる。すごくぜいたくなものを頂いている気になります」と信頼を寄せる。

大場さんは千葉県出身で、2016年から大長谷で夫や子ども3人と暮らしている。集落の人口は約50人。便利な場所ではない。市内中心部から車で1時間以上要する。コンビニも銀行もない。公共交通はコミュニティバスが1日2回往復するだけ。家にテレビがないので、家族団らんは白いシーツをスクリーンにした映画鑑賞だ。

「自給自足しているんですか」とよく質問されるが、スーパーにもショッピングセンターにも行く。「コストコでお肉をまとめ買いして保存しています。大長谷らしいことといえば、そこに地元でもらった野菜や、その辺で採れた山菜が加わるくらい」

と笑う。

生まれ育ったのは千葉県。国語と社会科が苦手だから、高校では理系コースを選んだ。やりたいことは特にない。資格が取りやすく、つぶしが利きそうだからと薬学部を志望した。地元の関東にでも入れる大学があったが、一度は親元を離れてみたかった。当時の富山医薬大薬学部に入った。

大学が力を入れて研究する和漢薬に関心を持った。化学合成した薬剤よりも、雑多な成分を含んだ生薬を組み合わせた和漢薬の方が副作用が少なかったり、健康に寄与することがある。生薬の中には、お香やスパイスの原料になるものが多いことも学んだ。「病院や薬局に行く前に、普段の生活でも健康を整えることは大切」と興味を持



「草生す」 広田 郁世

った。

大学院を出て、薬剤師の国家資格を取ったが、就職先は京都で歴史があるお香の製造販売会社を選んだ。同級生のほとんどは、製薬会社や薬局に入った。大場さんは「薬じゃなくても人を癒やせることもある」と流されることはなかった。実家の親には、なかなか理解してもらえなかった。

業務ではお香の原料となる植物の育成や原料の品質管理を担当した。伝統ある会社は社会貢献事業にも熱心だった。温暖化による積雪の減少や、狩猟者が減った影響で、京都の里山でシカの獣害が広がっていた。四季を彩る山野草を食べ尽くす勢いだった。そこで会社は京都府の絶滅寸前種などに指定されているフジバカマやヒオウギを自生地の手で株分けし、専門家のアドバイ

スを受けながら保護育成していた。

通常業務で植物に触れる機会が多かった大場さんが事業の主務者になった。育てた希少な植物は京都の寺や店舗、企業に配った。野趣に富んだ花は好評だった。海外で植林活動をしたり、季節の花の撮影のため、一日の大半を山で過ごしたりもした。学生時代は山岳部に所属し、アウトドアが大好きだった大場さんには天職だった。植物に関する知識も増えて、社内で頼られた。

結婚して3人目の子どもを身ごもった頃、心境に変化が芽生えた。人間の理解を超えた自然の尊さを伝える仕事をしているはずなのに、業務の効率を求められるのが苦しくなった。当時暮らしていたのは京都の中心部。2LDKの部屋の窓から京都タ

ワーが見えた。便利な場所だが、せせこましい。街と山を行き来する生活は、どこかちぐはぐな気がした。スキー関係の仕事を夫の紳平さん(48)は、冬には家をあけることが多かった。夫婦で子育てができる環境とやりがい求め、15年勤めた会社を辞めた。自然の中で暮らすと決めた。



海外や長野などのさまざまな候補の中から選んだのが、夫が生まれ育ち、自身も学生生活を送った富山だった。夫の知人が大長谷に縁があり、土地勘があった。

現地を見に行くと、豊富な植物に驚いた。ブナの下に笹が生い茂っていた。小ぶりの鉢植えでしか見たことがなかった多年草が身長を超す勢いで自生している。

京都で山の植物を扱った経験から、普通

の花屋には並んでいない野草の需要があることは知っている。大長谷に残る自然はまちなかで暮らす人には新鮮だ。ここで育てた草花を求める人がいると直感した。

大長谷は移住者が多く、大場さん一家はすんなり歓迎してもらえた。子どもが3人いたことで地域が活気づくと思ってくれた。大場さんが野草を採取し、まちなかの人を楽しんでもらいたいというアイデアにも理解を示してくれた。

稼げるわけではないが、大長谷の植物は個性派の花屋から引き合いがあった。虫が食った葉の穴を「味がある」と面白い人もいた。花を届ける活動を始めると、山の案内を頼まれるようになった。一緒に大長谷を散策して、植物を解説する。野草の酵素ドリンクを作る教室も開く。大長谷で採れた食材を生かしたレストランを営む森恵美さん(45)は、「みゆきちゃんが連れてくるお客さんは自然が好きな人が多い。お客さんがお客さんをまた呼んでくれる。すごくいい空気と循環が大長谷に生まれています」と言う。



まちなかを離れた暮らしは不便なことは多いが、不満をことさらに強調するつもりはない。自然の中の暮らしは何物にも代え難い。「頑張っていたら、お願いしなくても地域を応援してもらえんと思っています」

大長谷での日々は天気次第で変わる。雨が降れば、山のガイドは中止し、植物を探らない。代わりに家事や書類仕事をする。大場さんの客や取引相手もそれで納得してくれている。

「雨が降ったら、『自分の時間ができた』と受け止めます。今はネットで注文したものが翌日に届くのが当たり前前時代。スピードアップしすぎた分、真逆の価値観も生まれている気がする。『晴れた日でもいいですよ』と言ってもらえる」

自然任せの生活の中で、大場さんは自身がおおらかになった気がする。大長谷の自然が持つ癒やしの力を体感している。

大場さんは大長谷で育った花をまちなかに届けていますが、一番理想としているのは、大長谷の自然の中に実際に足を運んでもらうことです。花屋の軒先やガラスケースの中で見たことがある花も、実際に咲いている姿を山の中で見ると印象が全く変わります。植物の持つ生命力をより強く感じます。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773

次回掲載は7月1日(木)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局